
今日から新生活

NAO

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

今日から新生活

【コード】

N5243A

【作者名】

NAO

【あらすじ】

七年間付き合った恋人との別れ。七年という年月の終りに、いったいなにを思っているのか…

(前書き)

共同企画小説『新生活』。共同制作参加の先生方の作品は、『企画小説新生活』で検索すると見れます。

今日から新生活

私、中宮真琴なみやまことは、正直荷物をまとめるといふ作業は、あまり得意じゃない。

ダンボールの中に部屋の荷物を詰め込んでいる合間にも、私の集中力は、片付けとは別の方向に流れていく。

私が手に取ったのは、一枚の写真。

「まだ、片付かないの？」

私の背後から、この部屋の持ち主、金城雄介きんじゆうすけが声をかけてきた。段ボール箱と向かい合う私の肩越しから、手元をのぞいてくる。

「考えると爪を噛む癖、いい加減に直せよ」

親指の爪を噛みながら、苦々しい気分になる。

「別にいいじゃない。今日には出て行くんだし」

「そうだけどな…」

爪を噛むのを止めて、私が強い口調で文句を言うと、彼はとたんに語尾を濁した。

考えると爪を噛む癖は、子供のころからずっと続いてきたものだ。無意識のうちに、私は親指の爪を噛んでしまう。考え込んだとき、暇なとき、テレビを見ているとき。気がつくと私は親指の爪を噛んでいる。上あごの前歯と下あごの前歯で挟み込んで、爪の硬質な感触を味わっている。味のないガムをかんでいるような感覚。でもガムよりはずっと硬くて、それでいて壊れにくい。例えば、プラスチックを噛んでいるような食感に似ている。

いや、味わっているというのは語弊がある。私は決して爪が好物なのではない。

言うなれば、タバコと同じなのだ。吸っていないと、どうしても吸いたくなってしまふ。口寂しくなってきた、口にタバコをくわえなくなってくる。いつの間にか手にはライターが握られていて、慣れた作業で火をつける。

弁解のように聞こえるかもしれないが、私にとって爪を噛むという癖は、それぐらい常習的な行為なのだ。雄介がタバコを吸い続けるように。

「あと、これ。歯ブラシ、シャンプー、ボディソープ」

右手一本で、その三つを器用に持ってきた雄介。左手はタバコ専用で、いつも空手だ。私と話している合間にも、左手は口元にくわえたタバコの灰を落とす、一連の動作に使用されている。

「…ありがとう。でも、歯ブラシはいらさないわ。捨てて。他のは持つて行くから」

「わかった」

ダンボールの横にシャンプーとボディソープを置いて、私に背中を向ける。

「雄介はいい加減、タバコ止めたら？」

「…お前が爪を噛むのを止めたら止める」

「雄介がタバコを止めたら、私だって爪を噛むの止めるわよ」

雲行きが怪しくなってくる。胸中に立ち込める暗雲。私はそれを払いのけたくて仕方がない衝動を何とか押さえ込むと、再びダンボールに向かい合う。

一枚の写真は、まだ私の手の中にある。

付き合い始めてからすぐに撮った写真。

雄介の誕生日に贈ったデジタルカメラで撮影したもので、不慣れなせいでタイマー機能が使いこなせず、撮るのに苦戦した思い出がある。時間設定をどうやって変更するかが出来ずに、たった五秒間で撮らなければならなかったから、慌ててフレームの中に入ってくる雄介に押されて、私は前のめりになったり、フレームアウトしてしまったり。

結局十枚以上撮り直し、満足がいかないままプリントアウトした結果、出来上がった写真。

最近のデジタルカメラの画素数は良すぎて、細かい肌のきめまで写真として出てしまうのが厄介だった。

それ以来、私をデジタルカメラで撮ることは禁止している。

…でも、雄介と別れることが決定的、絶対的となった今では、カメラで撮るも撮られるも、どうでもいいことだ。

「また、爪噛んでるぞ」

右手に生理用品と、コップ、目覚まし時計をまとめて持ってきた雄介が、無意識のうちに爪を噛んでしまっていた私の上げ足を取る。左手はやはり空手。タバコの煙を吸い込んで、左手でタバコのフィルタ部分を持ち、煙を吐きだす。

左手は、タバコ専用。タバコ以外の何物にも優先させない。

「…ふざけないでよ」

雄介のデリカシーのなさ、もはや愛嬌ではなくなっている。

付き合い始めた当初こそ、野性的とか、前向きな方向で考えられただけ、同棲し始めた直後には、それはただの悪所にしか見えなくなった。

雄介の癖に我慢できなくなった私は、それを口に出すようになり、最初は優しく諭すようだったのが、年月を経て乱暴な言葉となり、最後には喧嘩腰になった。

それは雄介も同様だった。

爪を噛む癖を黙認してきた雄介も、段階を追って喧嘩腰になった。爪を噛むときに発生する、歯と歯のかち合う音が気になって仕方がないらしい。

そんなことを言ったら、お風呂に入りながら歯磨きをするのも雄介には止めて欲しい。

足の爪を切るとき、切った爪をテーブルの上に集めるのも止めて欲しい。鑑賞会じゃないんだから。

トイレだってそう。便座はきちんと下ろしてからトイレを出て欲しい。次の人のためを考えて欲しい。汚したら、きちんと拭くのだってそう。なんで、私が雄介のトイレの後始末をしなければならぬのか。トイレトーパーで拭き取ればすむだけのことなのに。他人のトイレの後始末をしている自分自身を思うと、私は空しくな

ってくる。仕方ないな、と思って拭いてあげたのは最初だけ。

外から帰ってきて、所かまわず靴下を脱ぎっぱなしにするのも止めて欲しい。洗濯籠に入れてと何度も言った。でも、雄介はそれを聞いてくれない。テレビを見ながら背後に放り投げ、私は顔面に雄介の靴下を当てられた。

それが、私の長年の怒りを爆発させた。

こんな男とは、別れてやる。

「真琴、茶碗と箸」

私に差し出す。タバコは吸い終わったのか、口にはくわえていなかった。

「真琴？ …泣いてるのか？」

「泣いてなんかないわよ」

七年…七年間だ。青春を捧げたといっているいい七年間。それがもうすぐ終わろうとしている。がさつで、ずばらな雄介に振り回された七年間だ。何度尻拭いをしただろう、嫌な思いをさせられただろう。同棲の甘さなんて、三ヶ月で消え去った。それからは、ただの嫌悪との戦いだ。

相手の悪いところばかりがクローズアップされて。

一度気にすると、頭から離れなくなつて。

それは雄介も同じで。私の悪いところばかりを指摘して。

付き合い始める前後は、あんなにお互いを褒め合つたのに、称え合つたのに。

「…悪かつたよ。俺が悪かつた」

タバコ専用の左手で私の涙を拭う。

「止めてよ、優しくしないで。タバコの臭いは好きじゃないって、いつも言ってるじゃない！」

「…そうかよ」

優しくする必要なんかない。

私たちはもう恋人ではないのだから。友達から恋人へ。恋人からは他人にしかねない。だから、私たちは、もう馴れ合う必要なん

てない。

「夕方には戻るから、それまでには出て行ってくれ。それと、合鍵は、鍵をかけたらポストにでも入れておいて」

雄介は背中を向けて外へ出て行ってしまった。ドアの閉まる大きな音が、雄介の怒りを露にした。

大量の荷物を車に積み込んだ私は、バックを抱えて、今、雄介のアパートのドアの前にいる。鍵を閉めて、ポストに合鍵を入れれば、七年間の同棲生活は終わり。缶ジュースでも買つかのような単純さで、物事は終わってしまう。淡白すぎる気もするが、逆に淡白なほうがいいような気もした。

「きつと、この七年間は私の身になってる」

誰かのために尽くした七年間。自分の悪所を思う存分指摘された七年間。馴れ合いの七年間。

物事はたいてい一人でこなせるようになったし、誰かの世話だって十分に出来るだけの力もついた。

なにより、雄介に散々指摘された悪い所を直す機会を得たと思えば、このうえのない転職に思える。

「雄介、私…行くね」

鍵を閉めて、ポストに合鍵を投入すると、私は通いなれた雄介のアパートを後にする。

足取りは決して軽くない。

でも、私はそれを引きずってでも歩かなければならない。

重りを背負って、引きずって。

それが私の足腰を、心を強くする。

やがて、その重りが軽く思えるときが来て、そして、最後に重さを感じなくなつたとき。

そのときこそ、新しい私の始まりなんだ。

「ん…ん」

太陽の真下で伸びをする。燦燦と照らす太陽は、私の体を暖かくしてくれる。固まった筋肉をほぐしてくれて、体を動きやすくしてくれる。

「絶好の引越し日和」

私の新生活は、こうして始まった。

(後書き)

興味を持って下さったかた、読んでくださったかた、ありがとうございます。引越のため、インターネットを使うことが出来なくなり、しばらくは携帯でしか作品を投稿できなくなってしまうました。そんな作者ですがこれからもよろしく願います。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5243a/>

今日から新生活

2008年11月7日08時15分発行